令和八年度　山口県立大学　国際文化学部　文化創造学科
「小論文」　問題用紙

一般選抜（前期日程）

問　次の文章を読み、その要旨を示したうえで、あなたが見たことのある修理の事例をひとつ挙げて、修理することが生み出す価値について、あなたの考えを八〇〇字以内で述べなさい。

修理は避けられない。モノは壊れる。耐久性に優れた製品もあるが、人間がつくり出す産物をここで非難しているわけではない。すべては劣化し、磨耗し、ばらばらに壊れる。それは宇宙の避けられない事実である。徐々に、不可避に無秩序な状態へと向かうエントロピー（注1）から逃れ得る者は誰もいない。その基本的な事実に、人は修理で対応しようとする。修理とは、その事実に抵抗する――ひょっとしたら覆せるかもしれない――努力なのだ。永続的に効果があるわけではないが、私たちがつくり出し、手に入れ、使用するモノを待ち受ける、塵（ちり）や瓦礫（がれき）にかえるという運命を食い止めることはできる。

修理は普遍的な行為でもある。あらゆる行為の社会的、技術的背景の一部を構成する。だが、私たちは多くの場合、故障を異常事態と捉え、計画や日常行為の邪魔をする、まれで予期せぬ混乱と考える。とはいえ、道路や地下鉄、オフィスビル、送電網、下水道に対する日々の修理の積み重ねがあってこそ、そうした計画や日常行為が可能になる。そうであるにもかかわらず、車が動かなくなったとか キーボードが故障したとか、何かしら問題が起こるまで、修理について考える人はほとんどいない。その結果、生活のなかで修理が果たす役割を、私たちは正しく評価していない。

あらゆるものが修理を必要とする。私たちは時に、自分の身体や人間関係、さらには社会の修理や修復について話し合う。だが、本書において修理とは、人間がつくり出したモノの形状や機能を元に戻すために、修繕したり再調整したりする行為を指す。とはいえ、その狭い定義のなかでさえ、修理には幅広いアプローチと動機がある。多くの場合、修理とは厳密に言って、元の機能に戻す行為だ。車が動かなくなった時、整備士が取りつける点火プラグの色について執拗（しつよう）に問いかけたりしないだろう。車が再び走れる状態に戻ればいいのだから。だが、修理の美的側面にもっとこだわる場合もある。お気に入りのジャケットをリフォーム店に持ち込んで、ほつれた縫い目を直してもらった時に望むのは、直しが目立たないことのはずだ。

いずれにせよ、修理の成功は魔法のごとく作用する。たとえば駐車場でバック事故を起こし、へこんだ車を修理工場に持ち込んだとしよう。うまくいけば、損傷したフェンダーの交換はある意味、時計の針を巻き戻すようなものだ。後方確認が不充分で、車を街灯にぶつけてしまった、その直前の瞬間にまで戻してくれる。修理のおかげで、完全に元の状態に戻ることはめったにない。だが、損傷を元に戻し、身のまわりのものの寿命を延ばすことは可能だ。その意味で、修理は保守的な行為に見えるだろう。あるものを――元の状態ではないにせよ――以前のかたちに戻そうとする努力は、たとえ単なる願望だったとしても、後ろ向きの取り組みだからだ。

リペア（修理）とよく似た概念に、レストア（修復／復元／元の状態に戻す）がある。修理とレストアはともに、過去に執着するという意味で共通点がある。新しいオーナーが、ビクトリア女王時代の邸宅を元の状態に近づけようとする時、過去を再物質化しようとしている。ところが、その過程で、間違いなくその間の数十年の歴史を消し去ってしまっている。それが、最善の行為なのかもしれない。だが、この選択は変化と、そして変化を表しているモノと私たちとの関係も変えてしまう。日々、些細（ささい）なものが積み重なって、年を経るごとに、人間がつくり出した産物の元の意味が変化していくことがある。（中略）修理や修復が、過去を無視するか否定するような方法で行なわれると、意味や背景を奪い取ってしまいかねない。

メンテナンスもまた、修理に密接に関係する行為だ。だが、メンテナンスはモノが突発的に壊れた時に行なうのではなく、むしろ予防的な行為である。故障を回避し、未然に防ぐ目的がある。修理と比べてメンテナンスは定期的に、たいてい同じ作業を行ない、徹底的に分解することも少ない。朝晩の歯磨きとデンタルフロスはメンテナンスにあたる。これに対して、根管治療は修理だ。だが、修理とメンテナンスは実のところ、関連し合い、重複する場合が多い。たとえば高速道路を走っている時に、車が右から左に少しドリフトしたとしよう。地元の自動車整備工場でホイールバランスを調整してもらった時、それは修理にあたるのか、それとも単なるメンテナンスか。機能は二者択一、すべてかゼロかではない。ホイールアライメントが多少ズレていたとしても車は走る。もちろん、その状態が気になる場合もあるだろう。メンテナンスと修理とのあいだに、明確な境界線を引くことはできない。とはいえ、区別することは役に立つ。メンテナンスは現在の状態を長く維持する行為であり、修理は以前の状態に戻す行為である。

現在の状態を維持したい、あるいは過去に戻りたいという衝動は、イノベーションを称（たた）え、最新性を重視するという、現代の文化で支配的なナラティブ（注2）とは相容（あい）れない。テクノロジーからポップカルチャーや政治まで、より有望な未来のために過去と決別しようという衝動は、満たされることは少ないにせよ、蔓延（まんえん）している。

電気自動車が手に入る時代に、なぜ一〇年前に製造された内燃機関の車を修理するのか。より軽く、より処理速度が速く、好きな色が選べる新機種があるのに、なぜ三年前のラップトップ（注3）を修理するのか。真のイノベーションを評価すべきではない、と言いたいわけではない。画期的な発明も漸進的な改良も、私たちの生活を目に見えるかたちで良くしてくれる。だが、そうした発明や改良と、イノベーションの振りをした単なる製品の差別化とは、慎重に区別しなければならない。明るい明日を謳（うた）っているにもかかわらず、イノベーションのナラティブが未来について語るのは、不完全で偏った物語だ。その目的は、特定の価値観や好みを――すなわち、最新のものを優先的に体験したい、新しいものが優れているという考えを――植えつけることだ。とはいえ、新しさとは当然、一時的なものにすぎない。新しいものを求める欲望が――少なくとも長期にわたって――満たされることはない。新しさがもたらす魅力的な約束はさておき、イノベーションのナラティブが見て見ぬ振りをしているものがある。それは、原材料を採取し、製品を製造し、最終的に廃棄するまでの一連のサイクルには、多くのコストが伴うという事実であり、そのサイクルが早ければ早いほど良いという考え方だ。そして、そのナラティブは、私たちが集団的に新しさに惹（ひ）かれることで生じる機会費用〔ある選択をしたことで手に入らなかった見えない費用〕に気づかない振りをしている。昨年のモデルと今年のスマートフォンを必死になって差別化していなければ、その時間やエネルギー、お金を他のどんなことに使うだろうか。

（出典　アーロン・パーザナウスキー著　西村伸泰訳『修理する権利　使いつづける自由へ』青土社、二〇二五年、二九～三三頁による。以上の文章に記述の形式について最小限の手を加えた。）

（注1）元は熱力学の用語で、物質の状態を表す度合い。ここでは、自然と無秩序な状態へ向かう法則のこと。
（注2）物語、語り。ここでは、言説や論調のこと。
（注3）膝の上に置いて使えるぐらいの大きさのコンピュータ。

令和８年度　国際文化学部　文化創造学科　一般選抜（前期日程）小論文
出題意図

【課題文の出典】
アーロン・バーザナウスキー著　西村伸泰訳『修理する権利　使いつづける自由へ』青土社、2025 年、29～33 頁による。

【出題意図】
課題文では、社会や生活における修理（リペア）が果たす役割を述べている。そして、レストア（修復）やメンテナンスといった類縁概念を整理しながら、自動車などを事例として、イノベーションが志向される現代において、修理の重要性を主張している。本出題は、こうした人間がつくり出したモノを再調整していく視点を通じて、デザインや地域文化の価値について受験生に考えさせることをねらいとする。そして、それらについて自分の考えをまとめる上での読解力、構成力、論理的思考力、発想力及び表現力を点数化して評価する。（244 文字）